ともかき

発行所
東京都立三田高等学校
青葉会
（定時制同窓会）
港区三田1丁目4番46号
電話（453）1991代

―昭和五十四年―
母校半世紀を経る

五十年という星霜は悠久の時の流れからすると、ほんのつかの間のことかも知れない。しかし、学校の半世紀は輝しい一つの歴史であり、そこを巣立った者にとっては大きな誇りであるといってよい。

母校は明年、創立五十周年を迎える。この間に、卒業していった者は五千名に近く、社会のあらゆる分野で活躍している。この五十年を回顧し、これを記念し、また契機として、母校のこれからを考えていきたいものである。

定時制の発足

本年は定時制高校が発足してから三十年目にあたり記念行事を催す学校が多かった。昭和二十三年、教育の機会均等を目指して、都立新制高校のほとんどに夜間課程が併設された。今と違って不安定な社会情勢の中、向学心に燃える若人がこの定時制の門をくぐったものである。戦後の社会の中で、飛躍的に増加した定時制の出身者が全日制に劣らない役割を社会のあらゆる面で果して来た。

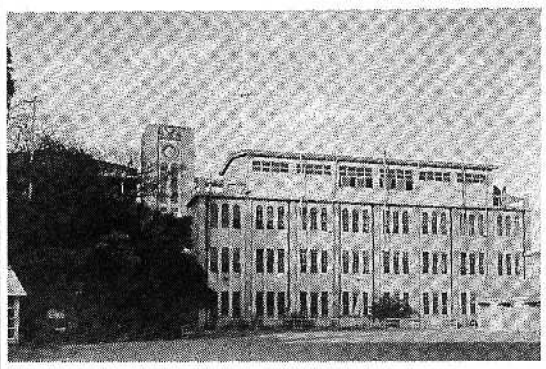
戦前の夜学校

この様な働く者の教育が戦前はどうであったか、夜学といわれ、苦学と同義語に使われた学校は都心のごく限られた学校にしかなかった。まして女子系の夜学は、男子のそれにくらべ、はるかにおくれていた。そうした中で昭和四年東京で初めて女子のための夜学校が生れた。これが母校の誕生である。今から半世紀も遠い昔、世の中は不景気の風が吹き荒れ、明治大正の名残りが街のあちこちにみられ人の心にも明治の気風が残っていた。当時女子に高等教育は不必要と一般に考えられていた。

母校の誕生

この様な風潮の中で、将来を見通し、働く女性にも教育は必要だと考え、それを実行に移されたのは、府立第六高女の初代校長丸山大作先生の卓見である。当時、女子の夜学校は本校以外にはなく府立第一高女（白鷗高）府立第五高女（富士高）府立第八高女（八潮高）などに夜間部が併設されたのは昭和十五年であったことを思えば、本校が女子系の草分けであったことは明かである。初めの出発は公立学校の校舎施設を利用する私立の学校だったが昭和十一年府に移管され、後に府立洗心女学校と改称、昭和二十三年新制高校発足と共に都立第六女子新制高校二部となる。

▲新　校　舎


▲旧　校　舎

また昭和二十五年現在の都立三田高等学校と校名が変りこの年から男女共学となり現在に至っている。その後も女子が圧倒的に多く昭和三十八年から男女ほゞ同数になった。

卒業生四、六〇六名

昭和五十三年三月の卒業生を含め、卒業生総計は、旧制を含めて四、六〇六名におよぶ。その男女の内訳は女子が三、六三三名、男子は九八三名と千に充たない数を示している。

卒業生の進路は多岐にわたり、官界、教育界、実業界などあらゆる分野に及び、芸術方面で才能を伸している者もあり、また海外で活躍している者も想像以上に多い。いうまでもなく、女子の大半は結婚し、立派な家庭人として子女育成・教育にあたっている。

五十周年を迎えて

来る昭和五十四年で母校は創立五十周年の記念すべき年を迎えることになるが、学校ではすでに準備委員会を発足させ、記念誌の構想を練り、また十一月に記念式典を予定準備をすすめている。

また、同窓会では旧制、新制を含めた同窓会名簿作成のため会員の現住所確認、整理を始め、特に今回は利用しやすいように索引をつけることにし、その作業が順調に進んでいる。また学校側に歩調を合せ、記念式典の行なわれるその日PTAと力を併せ、記念祝賀会を催す予定であり、そのほか母校に寄与する諸計画を練っている処である。皆さんの心からなるご支援をお願いする次第である。

思い出
創立四十周年の頃
前教頭　小沢正義

三田高校定時制創立五十周年が間近に迫っているということで、本当におめでとうございます。実に半世紀にわたって定時制の果たしてきた役割は、誠に計り知れないものがあろうかと存じます。

私は昭和四十三年四月から昭和五十一年三月まで主事として勤めましたが、この間、創立四十周年の記念式がございました。今やその役割をすませ取り壊されてしまいましたが、あの時計塔の聳え立つ古色蒼然とした校舎、ずらりと並んだ歴代校長先生の写真が、暖かく見守っていた講堂、同窓会所有のわかば会館などを使い、ささやかながら心のこもった記念式を行ったものでした。百留さんをはじめ給食の方々が夜を徹して豪華な祝弁当を作ってくれました。又PTAで購入したロッカーのひとますを、仲良く二人で使い始めたのもその時からだったと思います。

当時は生徒数も四百名近くおり、文化祭などは全日制の授業を中止し、全教室をフルに使って華やかに、充実して行われました。見学にきた他校の先生方や生徒会の人々が驚嘆して帰って行ったことを記憶しております。又当時の社会を吹き荒れた学園紛争の嵐は、三田では先生方の指導もさることながら、生徒自身の自覚と固い絆とにより、校内に及ぶことはありませんでした。外の騒がしさをよそに、教室では平常の授業が着実に行われておりました。

いろいろ世話をやかせた生徒もおりました。しかしみんな個性的で、厳しい社会を生き抜くことについて、その人らしい姿勢を持っておりました。さぞかし今頃は、それぞれ立派な社会人として一人前の働きをされていることでしょう。

思い出は尽きませんが、改めて三田高定時制の五十年にわたる歴史を、しみじみ思い返している次第です。

では定時制の地道な発展と皆様の幸せを祈りつつ筆を擱きます。

創立五十周年を迎えるにあたって
学校長　長谷部正治

同窓会の皆さんにはますますご健勝で各方面にご活躍のこととお慶び申しあげます。

本校は創立以来、全日制課程においては五十五年、定時制課程においては五十年の輝かしい歴史の歩みを進めてまいりましたが、ここでとくに申しあぐべきこととしては、近年ようやく老朽化してきた校舎および諸施設の全面改築が、一昨年そのすべての工事を完了し、三田高校は全く面目を一新して生まれかわったということです。二十世紀を望む教育の場として、それにふさわしい近代的設備と美しい景観を備えた新校舎は他に誇るに足るものがあろうかと思います。温水プール、格技室、音楽講堂などが完備され、定時制課程の専用施設としても新しく給食調理室、食堂、生徒会室などが設備されました。給食調理室および食堂については、近代的なすばらしい機械設備と清潔なゆったりした調理環境食堂設備であって、その中で生徒たちは毎日楽しく充実した栄養的給食を楽しんでおります。

こうした新しい学校環境の中で、日々の活動も活発に行われ、文化祭、体育祭修学旅行、演劇教室、弁論大会などをはじめ、いろいろなクラブ活動も多角的に元気に展開されております。

昨今、社会的情勢の推移によって、定時制課程に通う生徒の数が、全国的に漸減の方向にあることはご承知のことと思います。本校としてもその時代の波はさけられず、全校的に就学活動に努力しているにもかかわらず、漸次減少の傾向にあることは誠だ残念であります。しかしながら私たちは本校五十年の永い歴史の実績の上に立って、この豊かな伝統の燈をあかあかと燃やし続けなければならないと考えております。

明年は本校定時制も創立以来五十周年という栄光の年を迎えることになりました。都内に数ある都立高校の中にも、これだけの輝かしい歴史を誇りうる学校は少いと思います。それだけに今日を支える現在の職員生徒の使命と責任も大きなものがあるといえましょう。私たちはこの記念すべき年を前に、あらゆる困難を克服して本校発展の力強い歩みを進めなければならないと考えます。

本校では、この五十周年を期して、全校をあげてこれを祝うとともに、実りに満ちた記念行事も企画しております。

同窓会の皆さんにおかれましても、なにとぞよろしくご協力くださいまして、母校発展の上にお力添えを賜りますようお願いいたします。

同窓会諸兄姉のご健康とご多幸を心からお祈りいたします。

定時制の現状
―生徒年々減少―
教頭　久保道雄

私は三年前、小沢先生の後任として本校に着任しました。当時、既に新校舎の大部分は完成していましたが、はじめて学校を訪れた私は一見ホテルを思わせるしゃれた六階建の建物に一瞬とまどったほどでした。校舎内の設備も大変充実しており、暖房は全館暖房、給食も完全給食で、全校生徒が一度に食事のできる広々とした食堂があります。昨春には屋内温水プールや格技室などもでき、昨年六月に新校舎の落成式を盛大に行いました。このように本校発展のための物的条件は着々と整備されつつあり、私達教職員は「この新しい容器にふさわしい内容を」と生徒の教育に一段と情熱を燃やしています。

しかし残念なことに定時制生徒は年々その数を減じ、かつては数百名を擁した本校も、現在では百三十三名というありさま。これはひとり本校のみの現象ではなく、全都的否全国的な傾向です。都でも昨秋、定時制適正化の方針をうち出し、生徒数の少ない学校に対し「学級数の削減」「生徒の募集停止」「学校の統廃合」などを行うことを明らかにしました。私達は本校のような五十年にも亘る輝かしい歴史と伝統に映える定時制の灯を絶対に消すことのないように懸命の努力をしていますが前途はまことに厳しいものがあります。この機会に同窓会の諸兄姉に生徒数の確保について一層のご支援をお願いいたします。

さて生徒数は減り、学級数も九学級となりましたが、大部分の生徒達は教科にクラブ活動になかなか意欲的です。とくに生涯学習の意識のあらわれか五十代の年輩者や家庭の主婦の入学がめだち、多くのハンデを克服して立派な成績をあげているのはたのもしい限りです。まさに「新しい容器にふさわしい内容」が育ちつつあります。

私達は明年の創立五十周年を契機にして本校定時制の大いなる飛躍を期しております。

懇親会
○第一回　旧制合同クラス会
昭和十七年卒　今尾淳子

昭和五十三年五月二十七日。西の空が初夏の美しい夕映えに彩られる頃、文京区水道橋端のコンピラ会館へ四十代から五十代の年令の婦人が続々とつめかけておりました。到着した者は気軽く誰もが或いは受付を、或いは会計を、或いは会場準備をと働き出したのです。これから開かれようとする始めての「合同クラス会」に胸を弾ませ乍ら。そして昨日まであの学び舎で共に学んでいたような気やすさで。お台所に当日のお弁当に添へるお吸物の湯気が立ち始め、何枚かのクラス別の出席者名簿に出席済のチェックが殆んど印された頃、その人数は実に百名近くにふくれ上っておりました。

やがて此の人達の間に、お髪が少々白くなったとしか、お若い日と違わぬ諸先生のお姿を拝した時の感激、当日出席した者の等しき最初の感激かと思います。

洗心高女の合同クラス会は夢で無くこの様に実現されたのです。

先ず先生方の懐しくも暖かきお言葉、そこでまた再び私共は驚くのでした。先生方のお話のなされ方、お声からお身振り、それは四十年近く前に教壇に仰いだ当時と全然お変りになっていないのです。途端に私共は十代の制服の少女に戻っておりました。

教育者として人間として最高の先生方を生涯の師として仰ぎ得た事の倖せに今更乍ら浸るのでした。

〝たゝへよ若き生命を〟と、あの校歌が静かに会場を流れる頃は会も終りに近付いておりました。既に忘却の彼方に去って終った筈の校歌がどうして口を衝いて出てくるのでしょう。これにもみなひとしく驚いたのです。この校歌の様に少女時代のあの四年間に得たものが、その後のそれぞれの生き方の根底にいつもあって、動乱の時代を生き抜く心棒になっていたのではないでしょうか。

会が過ぎて数日後、松田先生から頂いたお葉書に、「百人の大集会は洗心としては勿論空前のことであり、あるいは絶後のことかもしれませんが、ともあれうれしいつどいでした。立派な社会人として、また家庭人として活躍しておられる顔々をあかずながめております」。とあり、このお葉書がその日の楽しさを語り尽して下さっています。あかずながめて頂く光栄、自分には身に余る光栄ですが確かに同窓の人々の活躍はすばらしく、友としても誇らして思います。この友同志も昔の面影そのままの人、半分位とどめている人、みな一堂に会し得たのです。

終りにこの会の企画・準備・連絡一切、私どもでいたしましたが、今後とも卒業生の動静が分りましたら、ご連絡をいただきたいと存じます。

なお、当日御出席の先生は、松田先生、横田先生、真田先生、名越先生、今村先生、級別出席者は、四回一名、五回一名、七回一名、八回甲八名、八回乙九名、十回九名、十一回十八名、十二回二四名、十三回十一名、十四回四名、計八七名。

なお、当日御出席になられなかった武田先生は、今もなお、青少年、成人の健康法に多大な貢献、御活躍をなさっておられる事を御報告させて頂きます。